

**第 13 回エコエリアやまがた推進コンクール  
最優秀賞（山形県知事賞）**

※掲載している情報は平成 30 年度時点のものです。

名 称	有限会社 鈴木農産企画
所在地	鶴岡市
応募タイトル	つなぐ技術 GAPに託す「おやじの米」

**1. 取組の背景・経過等**

**(1)オーガニック・エコ農業の取組み開始年**

有限会社鈴木農産企画は、鈴木孝征氏の父（故鈴木紀生氏）の代から有機栽培に取り組んでいた。平成 10 年に法人化して、平成 12 年から、土づくりにこだわった最高に美味しい米を「おやじの米」と名付け、販売を開始した。



図 1 「おやじの米」

**(2)動機**

平成 18 年の夏に勤めていた会社を退社し、実家の父のもとで農業を始める。実家は、庄内平野の南部に位置し、月山、朝日山系を源流とした良質な水に恵まれた所である。

父は「おいしく、安全な米をつくる」ことにこだわり、誰もが認めるおいしい米を作ろうとして、試行錯誤を重ねたところ、行き着いたのは、「土壌」であった。地力を高めるために、米糠、昆布、鰹節煮かす等を乳酸菌で発酵熟成させた、オリジナルの有機発酵肥料を使用して、土づくりを実施してきた。

父が長年の経験と研究によりこだわってつくった最高の米「おやじの米」を継承し、これからも安全安心でおいしい米をお客様に届けることを目的としている。

**(3)経営状況(面積、取扱い品目等)**

経営状況は、水稻のみの作付けで、すべて有機栽培と特別栽培である。品種は、JAS有機栽培米として、「雪若丸」「コシヒカリ」、特別栽培米として、「つや姫」、「雪若丸」「はえぬき」「コシヒカリ」「ササニシキ」「夢ごごち」を作付けしている。

表1 有機、特別栽培の取組状況

年度	作付面積 (ha)	有機栽培 (ha)	特別栽培(ha)		販売額(千円)
			農薬・化学肥料: 栽培期間中不使用	農薬:当地比 7 割減 化学肥料:栽培期間中不使用	
29 年度	16.0	3.6	0.16	12.24	59,800
30 年度	20.5	3.6	5.62	11.28	-

従業員は、常時雇用3名、臨時雇用が約10名である。転作は、互助方式で行っている(5.6ha 分)。

**(4)販路先**

東京都、大阪府、神奈川県、千葉県、愛知県等の百貨店等に販路を開拓している。また、約6トン(100 俵/60kg)は、直接販売している。加工用米、備蓄米として、「はえぬき」の一部(0.2ha 分)を農協に出荷している。

表2 全国の取扱店

東京都	伊勢丹新宿本店(菊太屋米穀店)、西武百貨店池袋本店(菊太屋米穀店)、松屋銀座(米処結米屋)、高島屋日本橋店(百貨店のお米売り場)、高島屋新宿店(高島屋ファーム)、東急百貨店本店(米処結米屋)、日本橋三越本店(越後ファーム田んぼネットワーク)
大阪府	大丸心齋橋店(菊太屋米穀店)、大丸梅田店(菊太屋米穀店)
神奈川県	笹屋、高島屋横浜店(高島屋ファーム)
千葉県	高島屋柏店(高島屋ファーム)
愛知県	丸六米穀店

**(5)環境保全型農業直接支払交付金の参加状況**

全圃場にて取組を行っている(有機農業の取組 9.2ha、水稻 IPM の実践と畦畔除草・秋耕の取組 11.3ha)。

**(6)各種認証の取得状況等(エコファーマー、特別栽培農産物認証、有機 JAS 認証、GAP 等)**

エコファーマーは、水稻で認定(平成 29 年度)を取得している。

有機JAS及び特別栽培について、以前は NPO 法人民間稲作研究所で有機JAS認証を取得していた。その後は、地元鶴岡市の鶴岡市農産物認定認証事業で認証を取得している。

GAPについては、百貨店からのニーズを先取りして、GAPがスタンダードになる前から認証を取得することが重要になると考え、ASIAGAPを平成 29 年 11 月に認証を取得している。また、将来、海外への販売も視野に入れ、GLOBALG.A.P.も平成 29 年 12 月に認証を取得している。

## 2. 取組内容

### (1) 土づくりのための取組み

ア. 土壌診断は、毎年、普及課に診断を依頼(平成29年度5か所)し、土壌の状態を確認している。土づくりには特にこだわり、お米のエキスである「米糠」、海のミネラル豊富な「昆布」、米のうまみ成分の素になる「かつお主体の魚粉」等を乳酸菌で発酵熟成させた、オリジナルの有機発酵肥料を使用して、肥沃な土づくりをしている。さらに、田植後に光合成細菌を流し込んで、稲の根を活性化させることにより、土壌の栄養分をたっぷり根に取り込ませている。

水管理は、雑草の発生抑制やイネミズゾウムシの食害対策に、移植直後から 10cm程度の深水管理を7月中旬まで実施している。

イ. 今年から、地元の養鶏場と連携して、鶏糞に魚かす、カニがら、にがり等を混合した肥料を作成し、地域資源の活用を図っている。

ウ. 水管理を徹底するために、水田畦畔の畦塗りを実施し、特に水尻側の畦畔と他生産者と隣接する畦畔には黒マルチで覆って、土壌の浸食、流亡対策を行っている。



図2 機械除草作業



図3 手取り除草作業



図4 オリジナル肥料の散布

### (2) 生物多様性に配慮した防除の取組み

ア. 有機栽培と特別栽培(節減対象農薬:当地比7割減)に取組むことで、化学合成農薬の使用を大幅に削減し、水田雑草には機械除草で対応するなど、生物多様性に配慮した防除を実践している。

### (3) 地球温暖化抑止や生物多様性保全等の取組み

ア. オリジナルの有機発酵肥料を使用し、地域内の有機性資源(鶏糞堆肥)を活用することで、土壌の炭素貯留効果による、温室効果ガスの発生抑制に努めている。

イ. 日頃から、水田の見回りに、軽トラックを使用せず自転車を使用して、省エネルギーに心がけている。

ウ. 移植後、約10cmの水深で7月中旬まで常時湛水管理をしている。その間に生き物の観察等を行い、生物多様性維持に配慮している。

### (4) 地域内外への波及に向けた取組み

ア. 平成30年3月5～8日に東京都台場で開催された、「世界食品安全会議 2018」に参加し、世界の食品安全に関する最新情報の入手、参加者との交流によるネットワークづくりに努めた。

イ. 地域資源の活用は、水稻農家から発生する米糠や籾殻を集め、地元の養鶏場に堆肥の資材として提供し、作成された堆肥を施用することで地域資源の循環や利活用を図っている。

ウ. 有機栽培や特別栽培をするうえで、周辺農家との共存を図るため、日頃から情報交換に心がけ、特に農薬散布作業時に配慮・協力していただいている。

また、消費者交流については、米卸、米穀店と連携して、販売促進活動の際に交流を図ったり、ホームページの開設やSNSを活用し、「おやじの米」について積極的に情報発信している。

### (5) 持続可能な経営の確立に向けた取組み

ア. 経営管理については、青色申告を実施している。

イ. 省力化技術については、成苗の育苗方法を、従来の播種量1箱あたり80g播きから、150gの厚播きにすることで、使用する苗箱数を減らす技術に取り組んでいる。

ウ. 「認定NPO法人メダカのがっこう」のフォーラムなどに参加したり、地域の先輩有機栽培農家との交流により、先進的な技術の導入や研鑽等に努めている。

エ. 「おやじの米」の販売は、契約販売により安定的に販路を確保している。

オ. お米の販売の他に、もち、米粉めん、米味噌について、原料を加工業者に提供し、自社での販売と米卸しを通して販売している。

#### (6)生産工程の見える化等の取組み

ア. 平成29年4月からGAP取得に向けた取組みを始め、最初は作業記録をつけることから始めた。その後、民間のコンサルタントによるコンサルを6回受け、また県のGAP担当者の指導を受けながら、農場全体のマニュアルづくりに取り組み、会社のコンプライアンスも明文化した。

イ. ホームページでは、有機栽培及び特別栽培の、それぞれの認証制度について、一般のお米との違いを丁寧に説明している。また、SNSには、田植や機械除草、オリジナル肥料の散布作業風景などをアップロードし、生産工程の見える化に取り組んでいる。

#### (7)人材育成活動

ア. 地元中学生の農業体験学習について、毎年、5月に受入れしている。また、臨時雇用には、山形大学農学部を主に雇用して、若い世代の育成に努めている。

イ. 従業員に対して、フォークリフト等の資格取得を支援したり、草刈り作業の安全研修、農業機械の操作・説明研修会を開催(年1回以上)、農林大学校の研修会への参加等、従業員の育成に努めている。

### 3. 活動の成果

#### (1)土づくりの成果

ア. 土づくりは、毎年行っている土壌分析の結果を参考にして、オリジナルの有機発酵肥料の施用量を調整(施用量:120~180kg/10a)している。移植直後からの深水管理を行うことで、イネミズズウムシの食害が減少し、ヒエ等の雑草発生が抑えられている(機械除草2回)。水稻の収穫量は、有機栽培で10a当たり240~360kg、特別栽培で10当たり480~540kgとなっている。

イ. 今年から新たに、鶏糞に魚かす、カニガラ、にがり等を混合した肥料を作成し、地域資源の活用と、土壌分析で不足する成分(石灰、カリ)の改善を図った(施用量:800kg/10a)。

#### (2)生物多様性に配慮した防除や地球温暖化抑止の成果

ア. 有機栽培、特別栽培をすることで、化学合成農薬の使用を大幅に削減した。また、移植後に約10cmの水深で湛水管理を続けることで、どじょうやみみず、タニシの発生が増え、生物多様性保全効果が期待される。

イ. 有機発酵肥料を使用し、地域内の有機性資源を活用することで、土壌の炭素貯留効果による、温室効果ガスの発生抑制が期待される。

#### (3)地域内外への波及に向けた取組み成果

ア. 地域内の水稻農家から発生する米糠や籾殻を活用するため、地元養鶏場に堆肥の資材として提供し、地域資源の循環に役立てた。

イ. 有機栽培や特別栽培をするには、周辺農家との共存を図ることが重要で、日頃から情報交換に心がけていた。その結果、信頼関係が構築され作付面積の拡大につながっている。

ウ. 米卸、米穀店と連携して、販売促進活動の際に、消費者と対面販売による交流を図ったり、ホームページの開設やSNSを活用し情報発信することで、販路の拡大につながっている。

#### (4)持続可能な経営の確立に向けた取組み成果

ア. 今年から面積を拡大した分について、省力化技術に取組み、育苗作業の省力化を確認した。今後の作付面積拡大に備えることができた。

イ. フォーラムへの参加は、参加者の体験談等を見聞きすることで、雑草対策や土づくりの技術を、自らの栽培に活かすことができた。

ウ. 米を活用した加工品は、もち6000袋(120g)、米粉めん2000袋(120g)等を、自社ブランドで販売することで、所得拡大につながっている。

#### (5)生産工程の見える化等の取組み成果

ア. 父から経営移譲して日が浅かったため、GAP認証取得に取り組んだことは、農場全体のマニュアルづくりの過程で、必要な技術や知識を身につける良い機会になった。また、GAPの考え方は、労働者の安全や環境への配慮が必要で、従業員への責任や地域農家との関係等、農業へ



図5 つや姫加工品

の理解を深める機会になった。

#### (6) 人材育成活動の成果

ア. 農業体験学習した中学生の反応は、「お米ができるまでの苦労がわかった」、農家の子息からは「家業の農業について理解することができた」等、お礼の言葉をいただいている。アルバイトの山大農学部生には、農業機械・肥料・農薬等農業関係企業への就職活動に役立ったと聞いていて、次世代を担う人材になると期待している。

イ. 従業員が資格を取得したり、各種研修会への参加により、資質向上が図られている。



図6 鈴木農産企画のスタッフ

#### 4. 今後の活動方向

鈴木農産企画は、将来的な規模拡大を100haとして、従業員も増やしていきたい。また、生産のみならず、6次産業化に率先して取り組み、加工食品についても拡充を図っていく。有機農業(オーガニック)を推進して、雇用を作り出すことで地域に貢献できると考えている。さらに、GLOBALG.A.P.を取得したことで、今後は輸出にも取り組み、「おやじの米」を世界中に広めていきたいと考えている。